

「防災研究を」越えまひ性脳

地震防災の研究者を目指し、高知大学で学ぶ脳性まひの男性がいる。2年生の渋谷友哉さん(20)は徳島県海陽町出身。小学生の頃に決めた夢に向かって進む青年は「障害があるからといって自分で限界を決めないで。夢は諦めなくていい」と、後に続く人たちに呼び掛けている。

高知大生・渋谷さん(徳島県出身)

「夢は諦めなくていい」

渋谷さんは、早産による黄たんが原因の「早産児ビリルビン脳症」手足を自由に動かさず、電動車いすで生活している。ストレスを感じると筋肉がこわばる症状がある。

大学進学を考えたのど、一人じゃ逃げられないう。犠牲を出さないために防災政策に障害者の視点を入れたい。そんな思いで、研究者を目指すことにした。

鉛筆を握れないため、学校の授業では教員らがノートを代筆してくれた。テストは口頭で解答し、難しい課題も乗り越えてきた。

中学時代には、大学進学に向けて普通高校に進みたいと、代筆で受験ができるよう県教育委員会に直談判。口頭でテストに答える様子を撮影した映像を提出するなど2年の協議を経て、徳島県で初めて代筆受験が認められた。

「防災といえは高知

大」と決め、理工学部の地球環境防災学科を目指した。センター試験、2次試験とも代筆で臨み、1浪して昨春合格。「支えてくれたみんなのおかげ。本当に感謝しています」

高知大もベッド付きの休憩室を構えたほか、スロープ設置や通路の段差解消といった工事を進め、受け入れ態勢を整えてきた。

授業では災害発生の際に二歩ムや防災工学などが学んでいる。ヘルパーが付き添い、授業を補助する学生が渋谷さんの横でパソコンを操作。記入が必要な課題は代筆で対応するなどし「学習環境に問題はない」と言う。

ただ新型コロナウイルスス下での新しい生活環境に、医学的にも避けたいストレスを感じることも。それでも「訓練は覚悟の上。これも経験。乗り越えなきゃ」と大学院進学を目標にしている。

いつも前向きな渋谷さん。障害を不幸と思ったりすることはない。自分の障害には必ず意味がある。一生かけて答えを見つけていきたい」と笑顔で話した。



↑ 防災の研究者を目指す渋谷友哉さん(左)と高知市の高知大朝倉キャンパス撮影時のみマスク不着用

(村瀬佐保)